「一本の花」(宮本百合子)と「山峡」(李孝石) 論*

ー女の＜産む性＞をめぐってー

明 惠 英** ・ 金 順 槇***

目 次

1. はじめに
2. ＜自立＞と＜隷属＞を生きる
   2.1 「仕事」をする
   2.2 「良妻」を演じる
3. ＜オキテ＞を破る-女の反逆、その次
   3.1 「女」を愛した女
   3.2 「甥」と寝る女
4. 揺れる<産む性>
   4.1「柘榴の実」を見上げる
   4.2 子が産めてこそ
5. おわりに

1. はじめに

宮本百合子が『改造』に中条百合子(1899～1951) の筆名で発表した「一本の花」(1927)は、百合子がソ連に旅立つ手前に書かれた作品である。一七歳で坪内逍

* 이 논문은 2단계 BK21 사업의 지원을 받았음.
** 全南大学校 日語日文学科 講師
*** 全南大学校 日語日文学科 教授・日本文化研究センター兼任研究員
底本；「一本の花」(1927)『宮本百合子全集』第四巻, 新日本出版社, 1981,「山峡」(1941)『韓国現代代表小説選』4 創作と批評社 1996。

www.kci.go.kr

遥の推薦を受け、「貧しき人々の群」(1916) を『中央公論』に発表して天才少女と騒がれた早熟な百合子は、その後から矢継ぎ早につづくアメリカ留学・恋愛・結婚・離婚といった長い嵐の数年間を題材にして『伸子』(1924) を発表している。百合子は離婚後、湯浅芳子という女性と二十代半ばから三十代の前半をともにしている。湯浅芳子との出会の日の様子は『伸子』の中に生き生きと再現されている[1)]。そして湯浅とは、単なる友だちとしてではなく、深く共感しあう恋人として分かち合ったと、百合子は述懐する[2)]。こうした私生活をベースにして書かれたのが「一本の花」である。百合子は五十一年の人生で、肉親以外の三人と深い関わりをもっていた。最初の夫荒木茂とは二十歳からの六年間を、次の湯浅芳子とは二十六歳からの八年間を、最後の宮本顕治とは三十三歳からの十八年間を過ごした。しかし、顕治の十二年間の拘留により実際の共同生活は晩年の六年間に過ぎない。そうすると、湯浅との生活が実質的にはもっとも長いことになり、二人は互いに打てば響く話し相手だった。

ところで、百合子は最初の夫荒木との間に子を作らなかった。その理由として結婚当初は、「育てる環境が整っていない点と、本能的にこわい」という二点を挙げ[3)]ていたが、離婚間近になっては、愛してもいない荒木の子は産みたくないというふうに変わる。こうした一連の経緯から、百合子は＜産む性＞を自己決定しているのである。そして男女の愛をすて、女同士の愛を選択し同棲に入る。岩淵宏子は、私小説「一本の花」のヒロイン朝子の心境変化を、「レズビアニズムの揺らぎ」として読み解いている[4)]。しかし氏の論から少し深読みをすると、朝子は大平にエロスを感じたと告白しており、同性愛者から両性愛者へと、そのセクシュアリティの形を変え、新しい視点を提示していることが見えてくる。

一方、韓国の近代を代表する作家李孝石は、1933年頃から人間の本能的な性をテーマとした作品を多く残しており、彼の文学の根底にはモダニズムがあると評される。自然への帰依を唱え、性愛の世界を大胆に描いたことから、＜自然主義＞は李孝石の小説に付けられる修飾語となっている[5)]。その反面、性を小説のテーマにしたことから、時代背景に照らして＜現実逃避＞と見る論評も多くを占める[6)]。李孝石は、文学雑誌『春秋』に短編小説「山峡」(1941)を発表する。「山峡」は、女の＜産む性＞をめぐって繰り広げられる、近代版代理母ストーリーとも言える小説である。主人公であるコンゼドという男は、自分が種を持っていない身であることを知らず、子どもが産まれないことを

1) 宮本百合子 (1981) 「伸子」『宮本百合子全集』新日本出版社 pp.352-354
2) 宮本百合子 (1981) 「一九二四年」『宮本百合子全集』別巻1 新日本出版社 p.63
3) 宮本百合子 (1981) 「伸子」『宮本百合子全集』新日本出版社 p.143
4) 岩淵宏子(1995)『フェミニズム批評への招待-近代女性文学を読む』 p.166
5) 辛炯基(2004)『植民地近代の視座』-李孝石と植民地近代 p.104
6) 林鐘国(1974)『裸負商精神の墜落-≪そばの花咲く頃≫の現実逃避』 p.100

www.kci.go.kr

あくまでも妻のせいにする。そしてそれを口実に、貧困で生活に困っている鋳物屋の主人に金を払って、彼の妻を勝手に家に連れてくる。こうしてコンゼドの跡継ぎへの執念は、一つの家庭を壊してしまうことになる。後に、妾は前夫の女の子を出産する。そして正妻の宋氏は、夫の甥と不倫し、男の子を産む。結果的に、彼は妻と妾との二人の女性を不幸に導いてしまう。こうしたことから、文学評論家李相沃氏は、「退廃的エロシティズム」として否定的に論じる7)。しかし氏の論には、女性の立場から見えてくる、ジェンダー構造が読み込まれていない。

さて、近代の二十年代から三十年代に注目しながら、三十年代を前後して書かれた二つの作品、女性作家の言葉で書かれた「一本の花」(1927)と、男性作家によって書かれた「山峡」(1941)には、四人の女性が登場する。＜産まない＞と決め、女の恋人と同棲している「一本の花」のヒロイン朝子は、大平という男性に「男を感じる」と告白する。そして彼女は、これらの感情を恋とは別なごく「自然な性欲」として感じるとする。しかし彼との関係はそこまでで、朝子はその後の進展を望まないと言う。が、これには幸子に対する配慮の気持も入っているように思える。一方、「山峡」の宋氏は、子どもが産まれないことを理由に夫から見捨てられる。その悔しさから、夫の甥にあたるズングンと不倫し、男の子を産むが、産んでまもないうちに突然死する。男性作家により産み出される女性像、そして、女性作家により描かれる女性像、こうした二つの作品には、異なる国の間での女性の生き方や、産む性をとりまいて繰り広げられるジェンダーやセクシュアリティの諸問題が豊富に盛り込まれていると思い、比較を試みる。

2. ＜自立＞と<隷属＞を生きる

2.1 「仕事」をする

宮本百合子は1924年に、百合子自身の結婚と離婚をめぐる経験をもとに私小説『伸子』を発表している。テクストの冒頭には、精力的に仕事をこなす男性たちを描いている。そしてテキストの最後まで、女性の仕事と自立について、力強く書いている。そもそも百合子がアメリカに渡った理由は、「よい小説が書きたい」からであった。六年間の結婚生活にピリオドを打って百合子は、同性愛に切り替える人生を選んでいる。

さて、その後　　の短篇「一本の花」のヒロイン27歳の朝子は、三年前に夫を亡くし、気の合った女友だちの幸子と恋人関係をもって同棲している。彼女たちは二人とも職業婦人であり、朝子は機関雑誌の編輯部で、幸子は大学で心理学を教えている。

7) 李相沃(2004)『李孝石の生と文学』pp.252～255

www.kci.go.kr

とにかく、相当教育のある連中が、脛かじりを名誉としなくなったんだからなあ。青年時代の熱情には、経済観念が全然なかった。今の令嬢は、独立イクオル経済的自立と、きっちり結びつけているんだから油断ならない。 p .33

ね、お幸さん、どう？私この頃懐疑論よ。働く女のひとについて。女権拡張家みたいに呑気に考えていられなくなったわ。 p .33

自分の職業なら職業が、人生のどんな部分へ、どんな工合に結びついているか、もう少し探求的でなけりゃ嘘なんじゃないのかしら。ただ給料がとれていればいい、厭んなったらその職業すてるだけだ。それじゃ、つまり女も男なみに擦れて、而も、彼等より不熟練で半人前だというのが落ちなんじゃないの。 p .34

朝子たちの家に遊びに来た幸子の従兄大平は、最近の若い女性たちの経済観念がしっかりしていていることを話題にしている。それを受けて朝子は、女性はもう少し「探求的」になってもらいたい、ただ給料のためにだけでなく、一人前の人間として仕事に関わるべきであると、職業婦人たちの職業意識を指摘する。

だからね、私だって、ただ月給九十円貰って、あてがわれた雑誌の編輯が出来るだけじゃ、生きてもいないんだし、職業も持ってるんじゃないのよー どんな雑誌を何故編輯するのか、そこまではっきりした意志が働いて、やっと人間の職業と云えるんだろうけれど。 p .35

朝子は「人間の職業」とは、金を稼ぐことだけでなく、その仕事に最初から最後まで携わることが肝心であるとし、人の分業によって大量生産を目指して人間を機械化していく近代産業社会の非人間性について非難する。そして、人々はみずからが仕事の全ての工程に立ち会い、物が完成するまで関わることこそ、もっとも＜創造的＞であり、＜生命的＞なものであると気づく。そのため、職業婦人はもっと「探求的」になる必要がある。こうした、仕事に関する朝子の考え方、つまり「探求的意志」には、最も＜生命＞的なものとして言及される。

百合子はエッセイで、創造的仕事に対して次のように述べる。

「或る人の芸術は、その人の人格並に生活と密接な、切っても切れない関係を持っている。その点から見て、女性の手に成った文学作品が、若し男性の手に成ったそれに比して常に第二流の芸術的価値ほか持ち得ないものとしたら、それはつまり女性が、人及び芸術家として、充分の創造をなし能う丈の人格も、生活をも持っていないと云う、一部の証言に

www.kci.go.kr

成るのではないだろうか。而も、自分にとって、創作は冗談や余技の憂さ晴らしではない。たといどんなに小さくても、自分から産み出された芸術の裡に、又は、創造しようとする努力の裡に、自分の生命の意味を認めずにはいられない力を、内から感じているのである。（中略）近代の文化は解放された人としての女性に、箇性の尊重と、人格完成の願望とを自覚させた。無論、女性が昔の偏狭な、恥辱的な性的差別に支配、圧迫された生活から脱して、一箇の尊敬すべき独立的人格者として生活すべき事を我にも承認させた。（中略）けれども、現代の一般社会には、女性の人としての生活、人としての発展を心から肯定し、助力しようとする傾向と並んで、因襲的な過去の亡霊にしがみ付いて、飽までも女性を昔ながらの「女」にして置こうとする傾向とがあるように、女性の心そのものの裡にも、何か捨てきれない過去の残滓が遺っているのではないだろうか。（中略）自分は、本当に「人」に成り度く思う。（中略）自分や他の女性が嘗て持ち、今もその遺物として持っている「人」としての弱小さは、人と成ろうとする努力によってのみ救われるだろう。如何にして人と成るか、如何にして真実な芸術を創造し得る魂を持つかそれは、その人々に遺された問題であると思う」（「概念と心其もの」1920.7 p 19 ）8)

百合子は、芸術創造の営みの中に自己の「生命」の意味を認め、真実の芸術を創造するために、女性の心に残る過去の残滓を捨て、一箇の尊敬すべき独立的人格者、すなわち創造的仕事を通じて「人になる」よう呼びかける。それゆえ、アメリカに渡って一人前の人間を目指していた百合子は、仕事にじゃまされたくないと思い、産む性を後回し続けてきたのである。

2.2 「良妻」を演じる

さて、「山峡」の女性たちはどうだろう。テキスト「山峡」には、宋氏と原州宅の二人の女性が登場する。宋氏は正妻であるが、子どもを産めないことで夫のコンゼドに蔑ろにされる日々を送っている。宋氏の夫コンゼドは子どもを産めない彼女の代わりに、鋳物屋の主人から妻の原州宅を、金を払って家に連れてくる。しかしそのことを、妻の宋氏には知らせていない。何も知らない彼女のために、普段、伯母のことを気の毒に思っていた甥のズングンは、宋氏に妾のことを知らせる。

伯父さんは口癖のようにいつも私のことをデュル牛、デュル牛といって馬鹿にしていながら、知らないうちに女を連れてきたわ。私がデュル牛なのかそれとも伯父さんが不具者なのかは誰も知るまいが、子どもが欲しい心は私も伯父さんには負けない。いくら祈願しても三神様は私の願望を叶えてくれない。妾の身から子どもが産まれることになると、私はこの家を去っていくしかないわ。 p .342 9)

8)宮本百合子（1981）「概念と心其のもの」『宮本百合子全集』14巻 新日本出版社 p 19
9) 삼촌은 입버릇처럼 언제나 둘소 둘소 하고 욕주드니 그예 계집을 데리고 왔구나. 내

www.kci.go.kr

ズングンから妾のことを聞いた宋氏は、「私がデュル牛なのかそれとも叔父が不具者なのかは誰も知るまい」と、悔しさを露にし、物語の反転を予告する。夫と妾の原州宅との初夜に宋氏は涙を堪えながら三神様に切に祈るばかりである。

> 合わせた手を解き、手の平を擦りながら静かに起き上がり、再び平伏し神棚に向って拝むのであった。壷の中に用意した百粒の豆を一粒一粒数えながら百拝を始めるのであった。起き上がっては平伏し、起き上がってはまた平伏しを繰り返しながらも疲れを見せない彼女であった。段々暗くなるにつれて彼女の姿は暗闇の中に隠れ、呪いを繰り返す声だけが微かに聞こえる。夫の初夜より厳かな夜の風景であった。 p .344 [10)]

韓国の女に生れた女性に与えられた生き方とは、もっぱら男の子を産むことである。それ以外、彼女に許された自由な人生は用意されておらず、跡継ぎの子を生産し、コン家を継ぐことだけが義務づけられているのである。しかし、物語の半ばにさしかかった辺りで、子どもを作れない原因は夫のコンゼドにあることが判明する。ところが、その真実すら物語の中では公にされないまま、宋氏は泣き寝入りを余儀なくされる。こうして宋氏は、元来もっていたアイデンティティを再構築（生物的女→子を産めてこそ女）していくのである。子を産めない彼女に、自我を顧みる心のゆとりはもはや持っておらず、最後まで夫の跡継ぎプロジェクトに協力すべく良妻を演じる。さらに、前夫に捨てられた原州宅は、前夫の子を産むことで良妻を演じ、元の家に戻ることができた。なお、宋氏は、自分を縛っている世間の慣習に挑戦状を突きつける。やがて彼女は、夫の姉の息子であるズングンと一夜を過ごして男の子を生む。宋氏は、インセスト・タブーを冒すことで、因習に歯向かい、世間に反旗を翻したのである。

3. ＜オキテ＞を破る一女の反逆、その次

3.1 「女」を愛した女

가 둘손지 삼촌이 병신인지 뉘 알랴만 나두 자식을 원하는 마음이야 삼촌에게 지겠니. 아무리 속을 태워두 삼신 할머니가 종시 원을 들주지 않는구나. 첩의 몸에서 자식이나 생기는 날이면 나는 이집을 하직하는 날이야.

10)모았던 손을 풀고 손바닥을 비비면서 조용조용 일어섰다가는 엎드리면서 단 앞에 절을 한다. 항아리 속에 준비했던 백 낟의 콩알을 한개씩 세면서 백번의 절을 시작했다. 일어섰다가는 엎드리고 일어섰다가는 엎드리고 하는 그 피곤을 모르는 가벼운 거동이 점점 짙어지는 어둠속에 사라지고는 나중에는 산신령의 속삭임과도 같은 웅얼웅얼하는 군소리만이 아련히 남았다. 외양간의 첫날밤의 거동보다는 한층 엄숙한 밤경영이었다.

www.kci.go.kr

前述の通り、テキスト「一本の花」は、作家宮本百合子の体験を基に書かれた私小説である。百合子は1918年父精一郎と渡米、翌年コロンビア大学聴講生となるが、ニューヨークで古代東洋語の研究者荒木茂と知りあい結婚する。そして、翌年の12月百合子は帰国し、後から夫荒木も帰国する。その後、百合子は日本での結婚生活を送るが、1924年、6年間の結婚生活にピリオドを打って離婚する。以後、ロシア文学者湯浅芳子[11]と知り合い、手紙を交わしながら親愛の情を深める。テキスト「一本の花」の中には次のようなくだりがある。

> 朝子は、幸子を愛していた。彼女は幸子のどんな些細な癖も知っていたし、欠点も、美しき善良さをも知っていた。幸子が癇癪を起し、またそれが時々起るのであったが、とても怖い顔をして朝子に食ってかかる。そのときの、世にも見っともない幸子の顔付を思い出してさえ、朝子は滑稽と幸福とを感じ、腹から笑うことが出来た。 p.42　横線筆者以下同じ

1924年百合子との同棲にはいる前に湯浅は、「性的生活といふものが人間の生活の上に如何に重大な位置にゐるかといふこと、それをあなたは考へますか[12]」と百合子に問いかけている。これに百合子は、「私が懐疑的なのは、欲望の満足とひきかえに、女は余り高く大切な大切な魂の何かの力迄渡すらしい、という点にあるのです[13]」と、答えている。ここでいう「余り高く大切な大切な魂の力」とは、女の自尊心のことであろう。男とのセックスが女にもたらす危険性に、この時点の百合子は気づいていたはずである[14]。性的生活を伴う以上、男女の「愛」という名のかけひきは、支配と従属の関係を本質として持つというのである。男女の関係はもちろん、エロスの問題だけに留まることはないが、エロスが身体という無意識の領域と関わるからこそ、現実の人間関係の根底を支え、その関係性を決定しやすいのである。同性同士の関係は、結婚制度に守られることもないかわりに、縛られることもない。互いの愛情だけが支えである。もちろん、非異性愛[15]を自己決定した以上、母性イデオロギー、つまり＜産む性＞からは自由になってい

11）（1896～1990）京都府生れ。露文科初の女子聴講生。共同生活をしていた中条（宮本）百合子と昭和2年から約3年間ソビエト滞在。ソビエト文学の翻訳及紹介に力をそそぎ、特にチェーホフを敬愛した。

12） 1924年6月13日づけで湯浅が書いた手紙。[沢部ひとみ「百合子と湯浅芳子」『宮本百合子の時空』（2001.6）翰林書房 再引用 p.314]

13) 宮本百合子(1981)『宮本百合子全集』別巻一　新日本出版社、 p62

14) 百合子の結婚生活に関しては、宮本百合子の長編小説『伸子』に詳しい。

15)非異性愛の可視化によって、異性愛主義の社会的・文化的偏向を問題化する理論。クィア理論が誕生したのは1990年代のアメリカ。元来、〝変態〟〝倒錯的〟といった侮蔑的な意味が与えられていた語〝クィア〟を、積極的・肯定的に使用することによって指示対象を置換し、ジェンダー/セクシュアリティをめぐる中心/周縁、規範/逸脱の権力構造を転覆しようとする。竹村和子(2002)

www.kci.go.kr

るはずである。したがってここまでなら、朝子のセクシュアリティの選択は、個としてまた種としての解放といえる。

ところが、ここで一つ見逃してはいけない点がある。それはつまり、朝子の大平に対する告白の意味についてである。

> ほんの一時的な火花で、神経が疲れていたせいだという位に考えていた、先夜の大平との感覚は、思いがけずいつまでも朝子の心に影響をのこした。(中略)微かなくつろぎに連れ、そんなとき、朝子の心に、例の引っぱりが感じられた。引っぱりは、依然重く、きつく、暗かった。然しその暗さは、精神上の不幸のように心から滲み出して、眼で見る風景までを黒幼ませる種類のものではなかった。 p 41
> それだのに、その熱い力は異様に牽きつける。真空のように吸いよせる。朝子の前身がそこへ向ってひたすら墜落することを欲した。その発作のような瞬間、朝子は自分の肉体の裡で、大きな花弁が渦巻き開き、声なき叫びで心に押しよせるように切なく感じるのであった。 p 42

朝子は幸子の従兄の大平に＜性欲＞を感じ、それは神経を疲れさせるほどの強度であった。そしてその感情はあくまでも精神的なものより、むしろ朝子の肉体の中での「大きな花弁が渦巻き開き、声なき叫び」なのである。言うなれば、朝子はその相手が誰であっても、男にオスの匂いを嗅ぎ付け、心から欲しているのである。百合子は、異性愛から同性愛へ、さらに両性愛へと、セクシュアリティの形を変えていく[16]。そうなると、当然、女の＜産む性＞の問題は再び言及されなければならなくなる[17]。

3.2 「甥」と寝る女

一方、「山峡」の＜隷属＞の生き方を強いられ生きてきた宋氏は、＜子を産めてこそ女＞、それが女の一番の喜びであることを、しっかりと内面化していく。このような宋氏を憐憫の目で見ている人がいる。それはコンゼドの甥のズングンである。彼は幼い頃両親が亡くなってからコンゼドに引き取られ宋氏の世話を受けて育った。彼は力持ちで、村で開かれる相撲大会で優勝を重ね、その度牛をもらってくる。ところがそんな彼を怒らせる出来事が起こる。それは、伯父のコンゼドが妾の原州宅を連れてきた時のことである。そ

『女性学事典』 p .100

16)ユング心理学においては、アニマ・アニムス概念によって人間は本来両性具有的な存在であるとされる。女性が抑圧してきた自分のなかの男性的人格や能力、たとえば合理的な思考であるとか、言説を操る能力であるとか、非常に明晰な知性、あるいは自立というものをどうして実現していくのか、ということが女性のアニムス問題である。小倉千加子(1995)『セックス神話解体新書』ちくま文庫 p 212

17)実際、その後の作品『乳房』(1935)で再び女の＜産む性＞を取り上げている。

www.kci.go.kr

の光景を村人に混ざって見たズングンは、「おかしな感じがする」とし、真っ先に伯母のところへ知らせに走り行く。これら一連のズングンの行動から、伯母の立場を思いやる憐憫の情さえ感じられる。

> 向こう山の中腹にきらきらと灯火が見えたが、黙ったまま畦道を歩いていると、宋氏の体温で背中が熱くなってきた。膝元で二十年も養って貰っている伯母を今になっておんぶできたと思うと、不思議な感じを覚えながら、思わず心が穏やかになってきてわあわあ泣きたくなった。 p.349 18)
>
> 東側へ七十里を行くと、そこには名高い五大山があり、その中腹には有名なオルジョン寺がある。三ヶ月分の食糧と器、服までも牛の背中に乗せてズングンは嬉しそうに叔母と同行した。 p.351 19)

夫の行為にショックを受けた宋氏は、苦しみ抜いたあげく、塩のにがりを飲んで自殺を図る。が、死ぬ寸前でズングンに見つけられ助け出される。そしてその日、宋氏を負ぶって帰ってくる途中で、ズングンは叔母から「不思議な感じを覚え」泣きたくなるくらい憐憫の情を抱く。そして、コンゼシルが連れてきた占い者により、男の子が産めると診断された宋氏に伴われ、加持祈祷のためにお寺へ向って「嬉しく」旅立つ。ところが、お寺から帰ってきたズングンの態度は何時もとは違う。そのことを奉公人のバクドンに気づかれる。

> ど田舎の山峡に住んでいるくせに大きな顔をする、欲張っても無駄だ。ひょっとしたらブンイ以外に好きな人ができたとか。お前、この頃様子が変だぞ。（中略）畜生、恥をかかせたら殺すぞ。 p.353 20)
>
> 百日祈祷が叶ったのか身ごもって三ヶ月になって帰ってきた。ズングンは嬉しいのか怖いのか分からず、胸騒ぎがしてこの日からは山に行って夕方になって下りてきた。 p.356 21)

---

18)건너편 뒷산 허리에 번쩍번쩍 움직이는 초롱불들이 보였으나 소리를 걸지 않고 잠자코 논두렁길을 걷고 있으려니 몸더위로 등어리가 후끈해오면서 그 무릎 아래에서 이십년 동안이나 양육을 받아온 백모를 이제 자기 등어리에 업게 된 것을 생각한즉 이상스러운 느낌이 생기면서 알 수 없이 잔자누룩해지는 마음에 엉엉 울고도 싶었다.

19)동쪽으로 칠십리를 간 곳에는 이름난 오대산이 있고 그 중허리에 유명한 월정사가 있었다. 석 달분 양식에다 기명과 옷벌까지도 소등에 싣고 증근은 기쁘게 백모를 동무해 떠났다.

20) “두멧놈이 큰소리한다. 욕심만 부리면 누가 장하다든? 그렇지 않으면 맘에 드는 사람 따로 생겼니? 너 요새 눈치가 수상하드구나.” (중략) “망신 주면 이놈 너 죽일테다.”

21)백일불공의 효험이 있어 석달이나 되는 무거운 몸으로 나타났다. 증근은 반가운지 두려운지 가슴이 떨리기만 하는 바람에 이날부터 산에서 어두워진 다음에야 내려왔다.

www.kci.go.kr

バクドンに、「好きな人ができたか」と言われると、ズングンはカッとなって鎌を振り翳しながら打ってかかる。後のある日、お寺に加持祈祷に出かけていった宋氏は、百日祈祷を終えてズングンの子どもを妊娠して帰ってくる。そうした事実を目の当たりにしたズングンは、「嬉しい」気持と「怖い」気持を同時に味合う。それも束の間で、ズングンは、山で熊を捕えてきて村を出ていく自立資金を作り、忽然と村から姿を消す。翌年の春、宋氏は男の子を出産するが、その赤ん坊は一ヶ月も経たぬうちに突然死んでしまう。

> 出産から一ヶ月が経ったある日、辛うじて起き上がった妻が何を思ったのかまた苦汁を飲んでしまった。いつも何か思い煩っていた様子に加え、二度目のその過激な行動からゼドはやっとただならぬ妻の苦しみに気づき、ぞっとさせられた。しかしその原因を聞く暇もなしに、一ヶ月あまりの赤ん坊は突然死んでしまった。(中略) 妻の言う通り、本当に病気で息子が死んだのかと、不審に思った瞬間、もう悲しさもなくなり恐ろしさで鳥肌が立った。コンゼドは気の抜けたように部屋から飛び出した。 p .363 22)
>
> …私たちだけだから言えるけど…ヒョンさん、この世に私のような悪い女はいないでしょう。ヒョンさんが聞いたら、ここで気を失ってしまうかも知れないから到底言えない。 p .364 23)
>
> 知ってたでしょう、ヒョンさん、…不倫の種で家長を喜ばせようとしても無駄ですものね。私の運命の中には、子どもを授かることはできないらしい。私は罪深い女よ。 p .365 24)

宋氏は、村からズングンがいなくなってから、もう一度苦汁を飲んで自殺を図るが、今度も未遂に終わる。この際、夫のコンゼドは、妻が苦しんでいることに気づくが、直接その理由を聞く勇気は持てない。そして、赤ん坊の死にさほど悲しがらない妻を見て、不思議に思ったコンゼドは、何かに感付いたらしくそのまま部屋を飛び出し、その足で牛に豆袋を乗せて村を去っていく。宋氏は、奉公人のバクドンの妻ヒョンさんに、これまでのことの顛末を告白する。もともと宋氏とズングンとの不倫は、コンゼドの強欲から生じたものである。しかし韓国ではタブー視される近親相姦は、赤ん坊を突然死させることによって罰せられる。こうして、韓国の＜男系思想＞は、山峡の村から、コンゼド、従弟のコンゼ

---

22)산후 한달이 되어 간신히 일어나 앉게 된 아내가 어느 날 무엇을 생각했는지 또 간수를 먹은 것이었다. 일상 때에 늘 걱정스러워하던 태도와 두 번째의 그 과격한 거동으로 재도는 비로서 심상치 않은 아내의 괴롬을 살피고 문득 무서운 고비에 생각이 이르렀다. 그러나 그것을 밝혀볼 겨를도 없이 겨우 달이 넘은 아이가 돌연히 목숨을 끊었다. (중략)어미가 말하는 것같이 정말 병으로 급히 목숨을 버린 것일까 하는 밑도 끝도 없는 당돌한 생각이 솟자 그 자리로 슬픔도 사라지면서 무서운 느낌에 소름이 쪽 끼치면서 정신없이 방을 뛰쳐나와 버렸다.

23)“…우리끼리니 말이지만…동세, 세상에 나같이 악독한 년은 없다우. 동세가 들으면 이 자리에서 기급을 하구 쓰러질 것 같어서 말할 수가 없구료.”

24)“알구 있었수, 동세. …불륜의 씨로 가장을 기쁘게 할래두 소용이 없나부. 팔자에 없는 건 어쩌는 수 없나봐. 난 죄많은 계집이요.

www.kci.go.kr

シル、ズングンの三人の男を追い出すことによって、男根主義に対する女たちの反逆は果たされる。

4．揺れる＜産む性＞

4.1 「柘榴の実」を見上げる

「一本の花」の前身ともいえる、長編小説『伸子』は、周知の通り百合子の結婚と離婚を題材に書かれている。主人公の伸子は同性愛を選択し、離婚を決意しており、その時＜産む性＞は後回しにされている。つまり、伸子は＜産まない性＞を自己決定しているのである。＜恋愛＞と＜仕事＞の比重を同等においていた伸子に、出産と育児は当然のごとく、仕事の邪魔になると考えたであろう。伸子は＜産まない性＞を選んだ理由として、育てる「環境が整っていない」、「本能的にこわい」、二点を挙げている。しかし、後回しにされた＜産む性＞を、伸子は忘れずに物語の後半で再び話題にしている。そこで伸子は、「佃を夫とする刹那、自分の裡にある女性が彼を父としては承認できないものだと拒絶した」とする。しかしなぜか伸子はそう思いながらも、佃に「子どもは欲しくならないか」と再度聞き、「子どもなんぞうるさくて仕方がありません」と、言わせる。また、「敬愛」していない夫の頭から「毛が抜ける」、「ふけが落ちる」などの場面を描き、＜優生学＞を露にし、佃に責任を擦り付けるような書き方をしている。そのため、伸子の＜産まない性＞の選択の問題は、「仕事の邪魔」から＜優生学＞にその論点が擦り替えられている。結局、『伸子』において、＜産む性＞の問題は最後まで後回しになってしまう。いや、むしろ百合子にとってこの問題は、女友だちの湯浅と知り合ったため、自然と二の次にされていたかも知れない[25)]。

ところが、「一本の花」にきて、朝子は再び男を描き出す。同居人幸子の親戚である大平に男を感じると文中で告白しているのである。これで、異性との関係を再び生じさせ、＜産む性＞の記憶を蘇らせているのである。

> ほんの一時的な火花で、神経が疲れていたせいだという位に考えていた、先夜の大平との感覚は、思いがけずいつまでも朝子の心に影響をのこした。 p 41
> 朝子が夫を失ったのは二十四のときであった。彼女は近頃になって、もと知らなかった多くのことを、男女の生活について理解するようになった。彼女の中に半開きであった女性の花が咲いた。若し今まで結婚生活が続いていたら、自分はこのように細か

25）明恵英（2004）「宮本百合子『伸子』と羅蕙錫『瓊姫』の比較研究」修士論文　p 105

www.kci.go.kr

に、何か木の芽でも育つのを見守るように心や官能の成長を自分に咲こうことが出来たであらうか。朝子はよくさう思ひ、世間並に考へれば、また当時にあっては、朝子にとっても大きな不幸で不幸を、ただ不運とばかりは考えなかった。一女一人の成長一自然はその女が夫を持っていようといまいと、そんなことに頓着はしていない。時が来れば、花を咲かせる。一自然は浄きかな一然し、朝子は、大平を愛しているのではなかった。朝子にとって、ぼんやり幸子の従兄として見ていた大平が、一人の男として、はっきり現われた点は同じであった。 p .41

転退(ママ)を欲する本能、一思いに目をつぶって墜落したい狂的な欲望、そういうものだけがやがて朝子の心の中に残った。それ等の欲望が跳梁するとき、常に仲介者として、大平の存在が朝子の念頭から離れぬ。 p .44

朝子と大平との間で起ったスパークは、彼女の中の「女性の花」を咲かせたのである。朝子は夫を失って3年経ってやっとエロスの萌芽を見、それを「官能の成長」と見なすことができた。そしてそれらの感情は、＜愛＞と呼べるものでもないとし、朝子はすでにロマンチック・ラブ・イデオロギーからは抜け出ているのである。それゆえ、＜性欲＞は＜自然＞であると言えたのである。その自然な感情は、本文中に「柘榴の実」に例えられ、再び女の＜産む性＞を持ち出している。

珍しく、今年は、低い枝にたった一つ実を結んだ。その実は落ちもせず、僅かながら色づいて来た。がらんとした長廊下や、これから相原に会い、買収策でも講じるであろう諸戸の周章した後姿、風に動く草まで、総て秋粛々と細長い中に、たった一つ柘榴の実は円く重そうで、朝子に何か好もしい感じを与えた。 p 40

女の恋人幸子に遠慮しながらも、朝子は自分の中に潜む自然な力を産む性につなげる。そして、いよいよその象徴として「柘榴の実」を描くまでに至る。柘榴と言えば、日本人にとっては女性に関わりの深い果物である。子どもを授けてくれる女神「鬼子母神」がお釈迦様からもらったのが石榴だったし、女性ホルモンの働きを補うために漢方薬として使われてもいる。柘榴の実はまさに女の＜産む性＞のシンボルなのである。したがって「一本の花」には、女の両性愛、産む性等の複線が作者のストラテジーとして敷かれていると言える。

さて、大正期（1912.7～1926.12）に、近代思想が孕んでいた自然征服観や生存競争の思想に対抗して、それを超えようとする思潮が登場し、「生命」がいわばスーパー・コンセプトに押し上げられていた。「生命」についての感情や観念は、誰でもが、それぞれにもっており、いつでも、どこにでも存在する。「生命」は人間のだれでも

www.kci.go.kr

が実感しうるものだし、誰もが、何らかの生命観をもっている。その意味で「生命」という観念は普遍性をもっており、歴史や地域性を超えて、思想を観察するための概念たりうる。フランスの哲学者アンリ・ベルクソンの「エラン・ヴィタル(生命の跳躍＝創造性の元)」の観念は、突然変異こそが生物進化の原動力という生物学の学説に基づいていたから、生物学的な生命主義ともいえる。<生命>を、世界の原理に据える思想の傾向、つまり生命主義は、宗教でも自然科学でもない、いわば人間の思考の第三極にあたるといえるだろう。社会のしくみや既成の価値観への批判が強まり、社会制度から独立した個人の内面が問われたとき、その内面を独立させうる根拠が普遍的なものに求められ、一方では<宇宙の意志>、<宇宙の生命>のような観念が、他方では生物学的な<生命>、とりわけ＜本能＞すなわち性欲が求められる。自然主義や社会主義の文芸は、＜内なる自然としての性欲＞が引き起こす悲劇をさまざまに書いていった[26]。

百合子にとって性欲とは、「人間の内部の自然な力」つまり、人間が自然の大きな「生命」の流れに重なる証だったのである。百合子のこれらの思想は、1910年4月に創刊された文芸雑誌『白樺』の精神に倣っているといえる。当時の『白樺』の思想の核心を、「性欲は真なり。従って善なり。美なり。而して聖なり。」と言い表されていた[27]。

> それだのに、その熱い力は異様に牽きつける。真空のように吸いよせる。朝子の全身がそこへ向ってひたすら墜落することを欲した。その発作のような瞬間、朝子　は自分の肉体の裡で、大きな花弁が渦巻き開き、声なき叫びで心に押しよせるよ　うに切なく感じるのであった。 p.42
>
> 朝子は、会って来たばかりの久保のこと、相原の生活、間には、新しく磨きたての磁石の針のように活々と光り、敏く、自分の内心に存在する感じるものについて考え、味い、長い、夕方の電車に揺られていった。 p.55

朝子の感じる「熱い力」、「肉体の裡で、大きな花弁が渦巻き開き」は、エロスの萌芽であり、「声なき叫び」、「針のように活々と光り」とは＜性欲＞そのものである。となると、朝子は＜産む性＞から自由でいられなかったことは明白である。

4.2　子が産めてこそ

「山峡」の宋氏と原州宅は、朝鮮の女であるがゆえに、コンゼドの跡継ぎ生産プロジェクト、つまり、父系始祖イデオロギーに犠牲を強いられる立場にある。コンゼドの妾になって嫁いできた原州宅は、村の風習通り牛小屋で初夜を過ごすことになる。

---

26) 鈴木貞美（1996）『「生命」で読む日本近代』 p.120
27) 鈴木貞美（1996）『「生命」で読む日本近代』 p.18

www.kci.go.kr

夕方頃、牛小屋にわらと筵を敷いて初夜を過ごす支度が終わっても、村人は家に帰ることも忘れて、牛小屋の隙間から伝統になっている、初夜の様子を覗こうと目をきょろつかせながら胸をときめかせていた。牛の本性に倣って、子どもをたくさん生産し、また、元気に生きるという意味で行われてはいるが、唐突すぎる初夜の風習に花嫁は戸惑いを隠せなかった。これを見た婦人たちは、′恥ずかしいことはない、牛のような元気な男の子を産んでコン家の代を継ぐことこそ花嫁の役目である′、と思って牛小屋に入れたと言っていた。p.343 [28]

子どもを産むための夫婦の営みはこうして牛小屋で行われる。原州宅には、「牛の本性に倣った元気な子を産む」ことが望まれる。

さらに、コンゼドの正妻宋氏は、結婚して以来子供が産まれないことで生きても生きた気がしないほど心苦しむ。

朝晩この席でこうして跪き手を合わせて三神様[29]にお祈りを捧げているのはもっぱらこの身に種を授けてくださるよう、仁者の三神様に朝晩ここでこうして、、、。(中略)今日は夫の二回目の結婚式の日。嬉しさを隠せない夫の姿を見ていると、私の心は複雑で辛いものがある。哀れなこの身にも女の喜びを味合わせてください。ゴン家に自身の血を引かせてくださるよう、こうして一途に三神様に、、、。p.344 [30]

初婚でなくても血統をつなげてさえくれれば、それでいい。養子を受け入れるなど死んでも嫌と思っていた矢先に、、、。p.345 [31]

万が一、血統が絶えることでも起ったら、祖先には大罪を犯すことになるのだ。p.346 [32]

---

28) 저녁 무렵은 되어 외양간에 짚과 멍석을 펴고 신방이 차려질 때까지도 돌아가려고 들은 안하고 외양간 빈지 틈으로 첫날밤의 풍습을 엿볼양으로 눈알을 굼실굼실 굴리면서 설랬다. 소의 본성을 본받아 잘 낳고 잘 놀라는 뜻이기는 했으나, 그 당돌한 첫날밤의 풍습에 색시는 얼굴을 붉히며 서슴거리는 것을 여자들은, 부끄럽긴 무에 부끄러워서 소같이 튼튼한 아들을 낳아서 공씨 일문의 대를 이어야만 장한 일인데라고 우겨서 외양간 안으로 밀어넣은 것이다.

29) 出産と育児に携わる家の中の神。

30)"아츰이나 저녁이나 이 자리에 무릎 꿇고 합장하구 삼신님께 비옵는 건 한톨의 씨를 이 몸에 주십사고, 인자하신 삼신님께 무릎 꿇고 합장하구 아침이나 저녁이나…"(중략)"…오늘은 혼인날에 요란히 기뻐하는 속에 내 마음 한층 쓰라리구 어지럽사오니 가엾은 이내 몸에두 여자의 자랑을 줍사, 공가에 내 핏줄을 전하게 하도록 합소사구 산신님께 한결같이…"

31)"숫색시가 아니래두 핏줄만 이으면 그만이야 그만이겠지. 양자를 들이긴 제발제발 싫다구 하든 판에."

32)만약에 혈통이 끊어지는 일이 있다면 선조에 대해서 다시 없는 죄를 짓는 셈이 되는 까닭이었다.

www.kci.go.kr

コンゼドは、正妻の宋氏から子どもが産まれないことを理由に、妾を迎え入れる。夫の結婚式があった日、宋氏は、人目を忍んで三神様に祈りを捧げているのである。彼女の願いとは、もっぱら女としての喜びである子どもを授かることである。そうして、コン家の血統が絶えないようにしなければならないと彼女は固く信じている。子を産めてこそ女なのだ。このように、男女間の性的結合が、牛の前で行われることや、子どもを授かるために豆粒を数える行為、宋氏の「種を授けて33)」と願う、呪術による韓国人の生命観を窺うことができる。さて、もう一つの韓国人の生命観を覗いてみる。

韓国人の儒教の生命観では、血統の連続の中で独立した輪が一つの長い鎖の形をしてつながっていると思った。こうした儒教的な生命意識の中では人間の死後、再びこの世に神とか魂という形で蘇り、子孫たちと共に生きていると信じる。こうした生命観は、父系始祖を生命の根元としており、個人は子孫を通じて永生すると信じる、人間の原始的信仰に基づいている。したがって婚姻の根本的な目的とは、祖先に祭祀を執り行い子孫継承のために嫁を迎え入れるのである。親不孝の中でも一番の親不孝は、跡継ぎの男の子を生産できないことである。そして血統の純粋性は、嫡子をもってのみ守られるものであると信じ、他姓の養子を許さず、同じ血統のいとこを養子とした34)。

なお、宋氏は「この身に種を授けて」と、ひたすら祈る。しかし、「男は種、女は畑」という日常的概念は、女性の卵子も種であるということから説得力に欠ける。しかしこうした科学的事実も、性別制度の威力の前では通用しない。

男性が種であるという主張は、男性だけが人間形成の起源であり、人類の本質であり、生産の主体であるということを隠喩する。しかしこのような談論を通じて、家父長制社会が真に強調したいことはおそらく行為者として男性の移動性、自由、超越性ではないかと思われる。種は、芽になって花を咲かせて実を結ぶまで変化を繰り返えす。そして種は変態する。種の起源性、流動と変化、発展性に比べ、畑あるいは地、'母の大地'の本質は、停泊性と不変性である。畑は種によってのみ意味を獲得する35)。

近代女性の様々なキャラクターを産み出してきた李孝石であるが、このような書き方から、やはり男性作家の視点の限界を見せている。

一方、西洋の哲学者ベルクソンは、＜産む性＞についてつぎのように論じる。「知性と本能のうち、生命に近いのは本能のほうである。いやむしろ本能とは、束の間の物質の切れ目においてとらえられた生命の飛躍そのものである。だからこそ、本能の活動は有機化という仕事そのものの延長上にあると言われるわけだ。たとえば、あらゆる本能のうちで最も本質的な母性本能は、いわば現在の世代を将来へ向けて運んでいく特異な衝動

33)ジョームスフレーザーは『黄金の枝』で、土は女性の生殖器と、種は精液と同一視している。そしてこれを、同種呪術と呼んでいる。J.G.フレーザー『黄金の枝』張秉吉訳ｐ．26
34）李ヒョゼ(1997)『男性と韓国社会』-韓国社会の男性イデオロギー　p.15
35）鄭ヒジン（2005)『フェミニズムへの挑戦』教養人　p51

www.kci.go.kr

が通過する場所である36)。」と、＜産む性＞を＜本能＞であると説いた。なお、日本では、1918年から翌年にかけて『婦人公論』や『太陽』などの誌上で展開されたいわゆる「母性保護論争」は、与謝野晶子の、妊娠出産に対する国家の保護という考え方を否定して、それをまったく私的な事柄としようとする、いわば没国家的な態度の表明をきっかけとしていた。そして、女性の地位向上と「社会改造」を期して平塚らいてうを中心として結成された新婦人協会は、「婦人の天職は矢張り母」、母たることは「女性として婦人としての本能の満足」であると宣言している37)。しかしこれらの言説は、今日、ジェンダー研究者たちによって、「生殖の自己決定権」の侵害という視点から熱く議論されている。

5. おわりに

以上、宮本百合子の短編「一本の花」(1927) と李孝石の「山峡」(1941) をジェンダ-とセクシュアリティの視点で読んでみた。するとまず、『伸子』の伸子が選んだ生き方を受け継いだ「一本の花」の朝子は、「愛する」幸子と同棲し、非異性愛を自己決定することで、＜産む性＞イデオロギーから自由になり、主体を生きることに成功している。しかし作者は朝子に、知人の男から＜オスの匂い＞を嗅がせ、自分自身の中に本能的にある＜性欲＞に目覚めさせる。こうした設定から、朝子の中に再び異性の情感を取り戻し、それを＜産む性＞につなげていく。そして＜産む性＞は最も自然で＜生命的＞なものであるとして、肯定される。そのため、朝子の＜女の反逆＞としての＜産まない＞イデオロギーは失敗し、後に最後の夫の宮本顕治と結婚する。

なお、「山峡」の宋氏と原州宅の生き方は、＜産む性＞イデオロギーに縛られ、もはや自立どころではなくなっている。彼女らは、夫の、跡継ぎプロジェクトから逃れられず、＜従属＞された生き方を強いられており、それに耐える女として描かれる。これには、儒教の教えによる生命観がバックになっていることは言及の通りである。

このように、「一本の花」の朝子と幸子は、仕事を持ち自立した女性として、「山峡」の宋氏と原州宅は、因習に縛られ運命に喘ぐ、あくまでも夫の意志に合わせようとする従属的な女性として描かれる。しかし、朝子は仕事の邪魔だからと後回しにしてきた＜産む性＞に戻り、原州宅は、前夫の女の子を産むことで、正妻の宋氏は、夫の甥と交わりインセスト・タブーを犯し赤ん坊を突然死させることで因習に歯向かう。こうして韓

36) V・ジャンケレヴィッチ(1988) 阿部一智、桑田礼彰訳『アンリ・ベルクソン』 p.207
37) 牟田和恵(2004) 「家族・性と女性の両義性」『ジェンダーと女性』 p.107

www.kci.go.kr

国の＜男系思想＞は、三人の男を村から追い出すことによって、男根主義に対する女たちの反逆は果たされる。なお、男たちの＜跡継ぎプロジェクト＞に関わった三人の男たちは、女たちに呪いを掛けられ、村から追放される。こうして女たちは、男性たちによる＜子を産んでこそ女＞の縛りから打ち解かれたく、男の願望である男の子を産まなくなる。

現代に置いて、フェミニストの上野は、「今日、若い世代がコスト負担を避けて身軽な人生を望むのは当然としても、ここにはますます進行する現代人の＜類的本質からの疎外＞による荒廃が顔を覗かせている」[38]と、＜産む性＞に関する若者たちの考え方に警鐘を鳴らしている。

38）上野千鶴子（1986）『女という快楽』 p.88

www.kci.go.kr

【参考文献】

・辛炯基(2004)『植民地近代の視座』-李孝石と植民地近代　岩波書店　p.104
・林鐘国(1974)『裸負商精神の墜落-≪そばの花咲く頃≫の現実逃避』アジア文化社　p.100
・李相沃(2004)『李孝石の生と文学』集文堂　pp.252～255
・明恵英 (2004)「宮本百合子『伸子』と羅蕙錫『瓊姫』の比較研究」文教大学修士論文 p.105
・李ヒョゼ(1997)『男性と韓国社会』-韓国社会の男性イデオロギー 社会文化研究所 p.15
・鄭ヒジン (2005)『フェミニズムへの挑戦』教養人　p51
・竹村和子(2002) 『女性学事典』岩波書店 p.100
・宮本百合子 (1981) 「伸子」『宮本百合子全集』新日本出版社　pp.352-354
・宮本百合子 (1981) 「一九二四年」『宮本百合子全集』別巻1　新日本出版社 p.63
・宮本百合子 (1981)「概念と心其のもの」『宮本百合子全集』14巻 新日本出版 p.19
・上野千鶴子 (1986) 『女という快楽』勁草書店　p. 88
・小倉千加子(1995)『セックス神話解体新書』ちくま文庫　p212
・岩淵宏子(1995)『フェミニズム批評への招待-近代女性文学を読む』学芸書林 p.166
・鈴木貞美 (1996) 『「生命」で読む日本近代』NHKブックス　p.18,120
・牟田和恵(2004) 「家族・性と女性の両義性」『ジェンダーと女性』早稲田大学出版部　p.107
・J.G.フレーザー『黄金の枝』張秉吉訳　三省出版社　p.26
・V・ジャンケレヴィッチ(1988) 『アンリ・ベルクソ』阿部一智、桑田礼彰訳 新評論　p.207

www.kci.go.kr

要 旨

本稿は、宮本百合子の短編「一本の花」(1927) と李孝石の短篇「山峡」(1941) とを、ジェンダ-とセクシュアリティの視点で読んだものである。

宮本百合子の私小説『伸子』の伸子が選んだ生き方を受け継いだ「一本の花」の朝子は、恋人の幸子と同棲し、非異性愛を自己決定することで、＜産む性＞イデオロギーから自由になり、主体を生きることに成功している。ところが、作者は「一本の花」で朝子に、＜オスの匂い＞を嗅がせ、自分の中に本能的にある＜性欲＞に目覚めさせ、それをもっとも生命的であるとする。そして、朝子に再び異性愛の感情を取り戻し、それを＜産む性＞につなげていこうとする。一方、「山峡」の宋氏と原州宅は、＜産む性＞イデオロギーに縛られた＜隷属＞の生き方をしている。彼女らは、夫の跡継ぎプロジェクトから逃れられず、ひたすら耐える女として描かれる。ところが、妾の原州宅は、前夫の女の子を産むことで、正妻の宋氏は、夫のいとこと交わることで、朝鮮の男根思想に＜反逆＞を試みる。

キーワード：産む性、反逆、インセスト・タブー、自立、隷属、生命

投　　稿：2007. 5. 31
1차 심사：2007. 6. 9
2차 심사：2007. 6. 30

姓　名：明 惠 英
住　所：(506-781)광주광역시 광산구 운남동 운남주공아파트 704-1005
電　話：010-9949-8557
e-mail：m1h00y9@hanmail.net

姓　名：金 順 槙
住　所：(500-757) 광주광역시 북구 용봉동 300번지 전남대학교 일어일문학과
電　話：062-530-3211, 016-600-0362
e-mail：sjkim77@chonnam.ac.kr

www.kci.go.kr